

金沢は前田家の城下町として発展した。外様大名であったこともあり、伝統工芸や伝統芸能に力を入れてきた。そういった歴史や風土から、現在も様々な文化政策が採られ、様々なアートのイベントを実施したり、オーケストラやクラシック事業への助成を行ってきた。

また、戦禍を免れたため、歴史に力を入れることが可能であり、歴史都市にも認定された。歴史・伝統尊重のまちづくりをしてきたが、20 年ほど前に現代美術館の話が出てきた。伝統に拘るべきだとの意見もあったが、新たな価値の創造をしてこそ伝統の価値があるという市長の判断がなされた。

かつて、この一帯には石川県庁があり、金沢大学があり、大学付属の小中学校があったが、それらが移転することになった。その小中学校跡に美術館を建設することになり、建設準備事務局や構想懇話会が発足した。

その後、基本構想では「現代に座標軸を置く」との文言が入った。基本計画が策定され、国際コンペで設計者が決定。妹島和世と西沢立衛、それぞれ世界的に著名な建築家である。

美術館は、新しい文化の創造と賑わいの創出という目的を掲げ、市の施策上は、金沢の文化を発信し、歴史と現代の対比を実現すると位置づけられている。

地下 1 階と 1 階の 2 層構造。B1 は主に貸しスペースとバックスペース。有料ゾーンと、無料の交流ゾーンに分かれており、有料ゾーンは金曜と土曜は 20 時まで営業。交流ゾーンは年末年始以外は開いており、22 時まで開放されている。

貸しスペースで行われた、とんねるずの木梨憲武展では、7 万人が来場。チケットを購入してから入場するまでに 2 時間待ちという状態だった。プールでは女優の杏の CM 撮影なども行われている。

キッズスタジオでは毎週末、親子でのイベントが行われている。託児室は営業中は常に開いており、事前予約制だが、美術館利用者以外も利用可能。年間で 1500 名を受け入れており、NPO に委託されている。

美術関連の図書が閲覧できるアトライブラリーや、ミュージアムショップ、カフェレストランなどもある。

建物は正面や裏がない、アートサークルという円状であり、直径が 113m。外周 350m。全体の事業費は 200 億円。建築費 113 億円、用地費 78 億円。多方向、水平性、透明性というコンセプトを持っていて、建物自体もグッドデザインやミシュラン 2 つ星など、評価を受けている。

事業は自主事業、貸し事業、地域との連携という 3 本柱。

自主事業では、企画展やコレクション展などの展覧会事業や、教育の中に美術館を組み込み、全ての小学 4 年生に来てもらうなどの教育普及事業、そして音楽やダンス、映像などとの芸術交流事業がある。

貸し事業では、市民ギャラリー。年間通して、ほぼ予約で埋まっている。抽選だが、当選するのは大変。公演やワークショップなども予約が多い。前田家ゆかりの茶室を移築し、伝統との融合を図っている。

地域との連携では、商店街などと連携し、例えばカフェのコースターを見せると入館料が 2 割引になる。逆に、チケットの半券を見せると、様々な店舗でサービスなどが受けられる。オリジナルグッズを開発し、販売。ロゴの入ったマグカップが売れている。図録を入れるための袋もヒット商品。

市立美術工芸大学や卯辰山工芸工房などとも連携し、卒業作品展などを行っている。

美術館は金沢市が設置し、財団が指定管理で運営。主にホール等を運営する財団。8 つほどの実績。37 名の職員がおり、30 名が財団のプロパー、7 名は市職員が派遣されている。

予算は、27 年度は 8 億 1 千万。施設管理費が 3 億 5 千万。1 億数千万が光熱費。ガラス張りなので高くつく。観覧料収入が 2.9 億、物販など 5 千万、市の負担が 4.7 億円。

年間の来館者数は増加傾向にあり、ここまで平均約 150 万人だったのが、26 年度は 176 万人。27 年度は 3 割増しペースで、220 万人ほどになるか。メディア広報件数は年間で約 1000 件。サスティン（維持）会員が 130 社。チケットサービスや会議室の貸し（特別）などを提供。友の会は 2000 人、85%は県内。他は近隣県。東京が 4 番目で 60 人程度いる。

（質疑より）

建物自体から考えても、50 万人程の来場者数を見込んでいたが、実際はその 3 倍以上が来ている。そのため、施設の無理も生じている。

指定管理について、文化施設は金沢市が 100%出資でないと指定しない内規がある。

当初は伝統との衝突も懸念されたが、近くの石川県立美術館では伝統的なものが多いので、同じようなものは要らないという主張がしやすい。133 億円の経済効果という数字も出ており、批判の声は小さくなった。